

# インゲン豆の栽培法

2011/10/15

## 特性と種まき

マメ科です。同じマメ科でもエンドウや大豆などより根粒菌の働きが弱く、エンドウほど強烈な連作障害は出ませんが、インゲンを作ったことのある畑では数年間空けて作付けするようにします。温度特性はエンドウ・ソラマメ(冷涼を好む)と正反対で15℃～25℃が生育適温(温暖を好む)で、特に20℃以下では発芽が極端に悪くなります。

露地では桜の花が散ってから蒔くようにしましょう。トンネルやハウスでは無加温の被覆下で播種しますが、発芽を左右するのは気温ではなく、地温であることに注意しましょう。無理な早蒔きは止め、大型トンネルで露地の1ヶ月～3週間程度前進するのにとどめましょう。硬実ではないので、水に浸漬せずに蒔きます(腐敗します)。一ヶ所に4粒以上蒔いて、種子の厚みの倍程度の覆土をし軽く抑えます。種子はエンドウと異なり、種子部分が子葉として土からはみ出します。覆土が浅かったり抑え方が足りないと種皮が付いたまま、健全に芽が展開できな

いので注意しましょう。インゲンは大別すると矮性の「つるなし」種と高性の「つるあり」種があります。前者は収穫までの期間が短く、一斉収穫に適し、無支柱で栽培できる特徴があります。一方、後者は「随時収穫が可能で収穫期間が長期間であること、支柱が要る煩雑さを取り返すだけの濃密な味の良さが特長です(私見です)。よく考えて栽培してください。

インゲンはあまり高温だと開花せず、開花しても落果します。したがって、7/中～8/上の高温期を避けて開花するような播種期を選びましょう。つるなし系やつるあり系のモロッコなどは特に敏感です。春は4～6月上旬まで、夏は7/中～8月が播種適期となります(九州佐世保において)。一株2本仕立てとしますので、種子は1ヶ所に4粒まきとします。

## 畑の準備と間引き

インゲンは光に敏感という性質もあります。密植や過繁茂は同化能力を低下させ、生育を阻害す

るので、高温条件と同じく、開花を抑制し、落果を促進します。つるあり種でトマトと同程度2～3株/m<sup>2</sup>、つるなし種で5株/m<sup>2</sup>が適当です。つるあり種で畝巾180cmの2条植/株間で株間40cm以上、つるなし種で畝巾120cmの2条植/株間30cm以上としてください。

また、上述したように根粒菌の力が強くないので、他のマメ科より窒素がやや多く必要です。元肥として、1m<sup>2</sup>あたり、堆肥約2Kg、苦土石灰約150g、8:8:8の配合肥料で約50g(少な目)程度をあらかじめ施肥、耕起、整地しておきます。発芽したら、二本を残し残りをハサミで切って間引きします。

## 管理と収穫

マメ科ですので控えめの窒素の元肥を補うため、一番花の開花を見てから追肥します。量は8:8:8で50～100g/m<sup>2</sup>です。つるなしは一回だけで十分。つるありは2～3回に分けて50g/m<sup>2</sup>位を与えます。開花したら、二週間位で収穫していきます。遅れるとスジが発達し韌も硬くなって美味しくなくなります。

